

では、**マタイの福音書 6章**をお開き下さい。この**6章**の本文に入る前に、山上の説教、すなわち**5章**から**7章**の講解説教の決定版と言われる D.M.ロイドジョーンズの説教の解説を少し皆さんにお分かちしてから、実際に**6章の1節**から一つ一つ言葉を皆さんにお分かちしていきたいと思っております。少し長いですが、少しでも聴いて下さい。D.M.ロイドジョーンズの『山上の説教』という本から拝読します。

『この6章もまた非常に心を深く探るものであることに気付く。もっと強く言えば、この章は心痛む章だとさえ言える。しばしば私はこの章は、聖書全巻の中でも最も読み心地の悪い章の一つだと思うことがある。これは私たちの心を探り、調べ、私たちの前に鏡を突き付ける。逃げたくても逃げられない。この章ほど自己謙卑と謙遜を促すのに適切な章はない。だがそのことを神に感謝しよう。キリスト者はいつでも自分自身を知ることに関心をもち、神を知るべきである。キリスト者以外に誰も真に自分自身を知りたいと願う者はいない。生まれながらの人は、自分で自分を知っていると思ひ込んでおり、確かにそのことのゆえに自分の根本的な欠陥をさらけ出している。彼は自己検討を避けたがる。というのは、自己を知ることが究極的には人が獲得し得る知識の中で最も苦痛に満ちた知識となるからである。しかし、ここに私たちを引っ張ってきて否応無しに自分自身と直面させ、ありのままの姿で自分自身を正確に見せてくれる章がある。だが、繰り返すがそのことのゆえに神に感謝する。なぜなら自分自身の何であるかを真に知った人だけが、キリストの身許に行こうとするのであり、神の霊に満たされることを求めるからである。そして神の霊だけが、私たちの中にある自我の痕跡やキリスト者としての生活や生き方を台無しにしようとする一切のものを、燃やし尽くしてくれるからである』と。

そこから、この章がどんな章か皆さんもイメージがついたと思います。鏡のような章です。私たちのありのままの姿を、真の姿を映し出す鏡であります。**6章の1節**から早速見て参ります。

『**人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から、報いが受けられません。**』

この山上の説教は**5章の1節**を見て頂くと分かりますように、イエスの弟子たちに対して語られているものであります。イエスの弟子たち。それは、ここにいる皆さんも含まれていることを覚えて下さい。イエスが今晚あなたに対して、『**人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。**』と警告をなさっております。この“**気をつけなさい**”という原語はギリシャ語で『**プラセホー**』”prosecho”と言います。この『**プラセホー**』という言葉は、船舶用語であります。船舶、船に関する言葉です。『船が正しい方向に航行するように、船の方向を維持する』という言葉であります。転じて、この『**プラセホー**』という言葉は、『ある特定の場所に向かわせるように方向付ける』という意味で使われるようになりました。ですからイエスの言葉に『**しっかりと耳を傾けるように**』それがこの『**プラセホー**』という言葉です。それを新改訳では“**気を付けなさい**”と訳しています。この『**プラセホー**』言葉は他にも**ヘブル 2:1**に使われております。ヘブル 2:1 では、『**心に留める**』というふうに訳しております。そこをお読みしますので聞いて下さい。『**ですから、私たちは聞いたことを、ますますしっかりと心に留めて** (プラセホーです。)、**押し流されないようにしなければなりません。**』船舶用語ですから、ちゃんと一定の方向に向いて勝手に流されないように。いろんな波が襲ってきます。風も吹きます。でも間違った方向に進まないようにしっかりと耳を傾け、そして心をしっかりと正しい方向に位置付けるように。この**マタイの 6章**の方では、偽善者たちが人前で行なう善行パフォーマンス。それはイエスの目には、神の目には、偽善であるわけです。でもその偽善の罪に同調しないように。人々はそれを偽善とは思っておりません。パリサイ人や律法学者たちの善行パフォーマンスは、人々からすればそれは敬虔な信者の証し、立派な振る舞い、スピリチュアルな人

たちと見えていたわけですが、でも神の目からはそれはおぞましい偽善行為だと。「そんな彼らに飲み込まれてはならない。そんな彼らの進む方向に押し流されてはならない。取り込まれてはいけない。」そのようにイエスは警告を与えております。**ガラテヤ 2:13** も参照したいと思います。イエスの弟子の筆頭であるペテロが偽善の罪に陥ってしまいました。で、そんなビックネームの有名なペテロが偽善の罪に陥ってしまったので、他の信者たちもついつい影響を受けてペテロの偽善の罪の方向へと引き込まれてしまったという、そういう内容です。『¹³そして、ほかのユダヤ人たちも、彼といっしょに本心を偽った行動をとり（これこそが偽善です。）、**バルナバまでも**（パウロの同労者、パウロの恩人でもある立派なリーダーです。そのバルナバまでも）その偽りの行動に引き込まれてしまいました。』偽善の罪に引き込まれてはならないと。気を付けなさいと、イエスは弟子たちに警告を与えております。キリストの弟子でも偽善の罪に陥ることがあるということを知りたいと思います。そんなことは今更言われるまでもなく、私こそは偽善者であると自覚している人は幸いではありますが、でもなかなか私たちはこの偽善の罪に気が付きませんし、「おまえは偽善者だ」なんて言われるとムツとくるわけです。偽善者呼ばわりされることが一番イヤだと。自分だけは偽善者になりたくない私たちは思う者、願う者ですが、でも実際自分が偽善の罪に陥っていることには気が付きもせず、またその罪を人から指摘されることに私たちは腹を立てるものであります。認めたくないからです。プライドがあるからであります。気を付けなさいと、イエスは言われます。あなたが偽善の罪に陥っていなくても、あなたに多大な影響を与える人が偽善の罪に陥ると、ついついそちらの方に自分も引き込まれてしまう。そういうおそれがあることも覚えて欲しいと思います。あなたが首謀者じゃなくても、あなたに影響を与えている人が偽善の罪に陥れば、あなたも気が付いたら同じ罪を犯しているということがありますので、注意して頂きたいと思います。夫が偽善の罪に陥ると妻も偽善の罪に引き込まれます。そして子供たちもその罪に引き込まれていきます。気を付けたいと思います。上司が偽善の罪に陥れば、部下も偽善の罪に陥っていきます。牧師が偽善の罪に陥るならば、教会員もまた偽善の罪に引き込まれていくということを知りたいと思います。

で、ここではいろんな偽善の罪がありますがけれども、**マタイ 6章**のこの山上の説教の冒頭では、**1節**にあるように『¹人に見せるために人前で善行をしないように』まずはこの点において偽善の罪に陥ってはならないと、イエスは警告を与えております。『人に見せるために人前で』という言葉が重要です。私たちは人に見せるためではない。むしろ、言わば神に見せるためと言っても良いかもしれません。人に評価されるためじゃなくて、神に評価されるため。人目を気にするんじゃなくて、神の目を気にするべきであります。ですから『人に見せるために人前で』という思いを常に持てば、必ず偽善の罪に陥ってしまいます。そうではなくて、神がご覧になっている。すべてのことは神の前に裸同然、さらされているわけです。へブル **4:13** にもこう書いてあります。聴いて下さい。『造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。』人がどう見ようと、人がどう評価しようと、どんなに人から褒められようと、称賛されようと、持ち上げられようと、人から褒め言葉をもらったとしても、神はあなたのしている行為を褒めて下さるでしょうか。評価して下さるでしょうか。認めて下さるでしょうか。「よくやった。良い忠実なしもべだ」と言う言葉をあなたは期待できるでしょうか。**マタイ 5:16** をお読みします。『このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。』「あなたがたは世界の光です」と、イエスはおっしゃいました。「その光を隠してはいけない。むしろ、その光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、人に見せるようにして、そして天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい」と。「この言葉と矛盾していないですか」と、疑問を抱く人も中にはあるかもしれません。「**マタイ 5:16** と **マタイ 6:1**、これは相反するんじゃないですか。」食い違いを感じてしまうかもしれません。「光を人々の前で輝かせるのが良いのか、それとも人に

見せるために人前で善行をしない方がいいのか。一体どっちなんですか。」ロイドジョーンズもこの点を指摘して、彼曰く「どっちなのかじゃなくて、両方だ」と言っています。人の前でも私たちは良い行いをします。けれどもそれは人に見せるために行なうものじゃないということです。むしろ、神を意識して、そして積極的に善行を行い、そしてその動機というのは神をあがめるため、神に栄光を帰すためであると。自分に栄光を帰すためではない。自分がスポットライトを浴びて自分に関心を、注目を引き寄せるためではない。ですから、心の動機が正しければど大人前でも良い行いをすべきなんです。良い行い自体が偽善なのではないです。偽善なのはその心の部分、態度の部分であります。それがこれまでずっと**マタイの福音書の5章**でも語られていた問題点でありました。表面的には十戒をことごとく守り行なうことは、パフォーマンスとしては可能かもしれませんが、神は心をご覧になると言っています。心の中で女を情欲の目で見るならば、すでにその人は心の中で姦淫の罪を犯したのだとイエスは指摘されています。人を殺していなくても、心の中で腹を立てるならば、「能なし。ばか者」と。常に殺人を犯しているんだということをイエスはお話しておりますので、もう矛盾はないということが分かると思います。気を付けなさい。偽善者の方向に流されないように。人々の注目を集めるのではなくて、むしろ神がどこに注目しておられるのか。そのことに心を留めなさい。“善行”という言葉は、ギリシャ語では『イレイマスネ』”eleemosune”。この『イレイマスネ』という言葉はもともとは“憐れみ”という言葉であります。『慈善、チャリティ』という風にも訳すことが可能です。**2節**に『施し』という言葉が使われております。*印がついておりますので、欄外を見て頂くと、「あるいは慈善の行為」となっています。**1節**の『善行』と言う言葉と**2節**の『施し』という言葉は、原語は同じです。『イレイマスネ』であります。**1節**ではそれを『善行』と訳し、**2節**ではそれを『施し』と訳していますが、原意は『憐れみ』でありますから、“慈善行為”が直訳であります。なぜ、**1節**と**2節**で違って訳しているのか、よく分かりません。**1節****2節**同じ原語を使っているんだしたら、私は同じように訳したほうが良いかと思うんですが、確かに“慈善行為”は『善行』であることは間違いないわけです。でも、動機が不純であるならば、その“慈善行為”は『偽善行為』になるんだということです。人前でのパフォーマンス。「私はこれだけのものを困っている人に、貧しい人に施しました。慈善団体に寄付しました。チャリティーをやりました。」それは偽善だと言っているわけです。むしろその際には**2節**にありますように、人に褒められるためではない。むしろ、**1節の終わり**にあるように「天におられるあなたがたの父から、報いを受けたいならば、父に褒められるように。世間の称賛を受けるその報いはあまりにも儂いものである」と。「それは一時的なもので、この世限りのものである。その一方で天の父が報いて下さるその報いは、ただ人々から認められるという程度のものじゃなくて、神に認めてもらい、神に評価してもらい、それは天の宝となって、永遠に天国を楽しみ味わうところの報いとなる」と。ですから善行をするということ、また慈善活動をするということ、チャリティー活動をするということ。このことはすべて素晴らしい行為です。ただし、それが偽善によって行なわれるならば、それらはこの世の報いで儂いものとなってしまいます。永遠において計り知れない報いをもたらす行為が。この世限定の儂い行為となってしまう。それに対してイエスは注意を促しているわけです。いくら善行を重ねようとも、慈善活動に勤しもうとも、人に見せるために人前で、人に褒められたくて、人に対して行なってるならば、確かにそれに対して報いはあるけれども、その報いは人間から受けるだけのものであって、神から受けられるものではないと。

誤解しないで頂きたいと思います。「偽善者になりたくないから私は善行はしません」とか。「偽善者になりたくないから私は人に施しなんかしません。」これは全く考え違いも甚だしいということです。動機が問われているだけです。動機が間違っているならば、善行などしない方が却って良いくらい、施しなんかしない方が却って良いくらい。なぜならば、それらには永遠の価値が無いからであります。

使徒5:1を開いて頂きたいと思います。初代教会における偽善の罪がここに暴露されております。

『¹ところが、アナニヤという人は、妻のサツピラとともにその持ち物を売り、²妻も承知のうえで、その代金の一部を残しておき、ある部分を持って来て、使徒たちの足もとに置いた。³そこで、ペテロがこう言った。「アナニヤ。どうしてあなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて、地所の代金の一部を自分のために残しておいたのか。⁴それはもともとあなたのものであり、売ってからもあなたの自由になったのではないか。なぜこのようなことをたくらんだのか。あなたは人を欺いたのではなく、神を欺いたのだ。」⁵アナニヤはこのことばを聞くと、倒れて息が絶えた。そして、これを聞いたすべての人に、非常な恐れが生じた。』ここで止めておきます。この後、夫が死んだことを聞かされた妻のサツピラも同じように倒れて死にます。偽善から慈善行為をするならば、却ってしない方が良くらいです。慈善と偽善。紙一重であります。心一つでその慈善行為は、偽善行為に成り下がってしまいます。主は私たちの心をご覧になり、私たちの動機を探られます。何のためにあなたはそれをするのか。人に見せるために、人前で、素晴らしい人と思われたいから、感謝されたいから、人からの注目を受けたいから、人間からの報いを受けたいから。それが教会の中でなされる場合、人を欺くのではなく、神を欺くということに繋がります。イエスの弟子がイエスの名によって偽善行為を行なうならば、あなたは大きな代償を払わなければなりません。そしてイエスは私たちに気を付けなさいと警告を与えております。報いが受けられないのは悲しいことです。私たちが神から報いを受けられるのは、この地上にいる限りの話です。生きたまま空中に引き上げられて、そして天国に入れて頂いたら、それで報いを受けられるチャンスはそれまでであります。すぐにキリストの御座の裁きというものを私たちは受けることとなります。または携挙の前に肉体が死んで、そして天に上げられるというケースもありますが、どちらにしても最終的にはイエスの前に私たちは立ち、そしてキリストの御座の裁きという、それは罪に定める裁きのことではなくて、私たちの報いを算定し、そしてその報いを授与される裁き。その御座の裁きの『御座』という言葉は、『ビーマ』若しくは『ペーマ』というギリシャ語なので、それは古代オリンピックにおける表彰台を指す言葉です。オリンピックの選手が表彰台に立って、そして審判から花輪の冠を受けるわけです。今日はメダルを頂くわけですが、そのようにして報いを受けるわけです。それは**第2コリント 5:10**に書いてあります。『**なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現れて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。**』それは、この地上生涯を通じて私たちが成したこと。もし、私たちがキリストの御名の故に、御名のために、神の栄光のために行なうならば、それはすべて報いとして算定されます。でも、その際に心の動機をイエスは問われますから、偽善から行なっていたのであれば、数多い善行も慈善活動もそれは評価の対象にはならないわけです。「**気を付けなさい。**」と言われます。「**報いが受けられないから。**」とイエスは言われます。すべては動機によって審査されるということです。何のために、何の目的で、誰のために。『**人に見せるために人前で**』というものはすべて偽善ですから認められないものです。それは報いにはつながらないものです。まあ、せいぜいこの世の人たちからは認めてもらって褒められるかもしれませんが。もしかしたら天皇陛下からも認めてもらって、いろんな褒賞を頂くかもしれませんが、でも現人神であるイエス・キリストからは何の報いも受けられないということです。

テキストに戻って頂いて**2節**に『**だから、施しをするときには、人にほめられたくて会堂や（“会堂”というのはユダヤ教の会堂、シナゴグ。今日の教会のような施設。）通りで施しをする偽善者たちのように、自分の前でラッパを吹いてはいけません。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。**』偽善者たちのようであってははいけません。この“偽善者”という言葉は“ヒポクリテース”と言います。この“ヒポクリテース”という言葉は、ギリシャの古典劇の役者たちのことを指す言葉でありました。当時の役者たちは、仮面をつけていました。そのように仮面をつけた役者のことを“ヒポクリテース”と言ったわけです。で、当然彼らは大げさに演じて見せるわけです。偽善者とは正にそういう者です。パフォーマーということです。自分が仮面をかぶって善人面して、そして大げさにパフォー

マンスをして見せるわけです。そして、舞台の上で主役となってスポットライトを浴びて、観客からの歓声を浴びながら拍手喝采をもらい、名を上げるわけです。有名になるわけです。お金をもらうわけです。それが偽善者であります。外見は、外面的には良い行為に見えても、それが真心からでない、本心からでない、良心からでないものならば、むしろ虚栄心、利己心から出たものであれば、それはすべて偽善行為であります。日本語では『腹黒い』とか、『ごますり』とか、『食わせ者』なんていう言葉が類義語としてあります。全部偽善者ということです。

イエスはこの**6章**のところでは、善行の中で“**施し**”、“**祈り**”、“**断食**”の三つを取り上げております。これら以外にも勿論当てはまるわけですが、代表的なものとして当時偽善者たちが、よく施しをし、よく祈り、よく断食をしたわけですが、それを彼らはすべて人前でパフォーマンスとして行なったわけです。そして人々からは「この人たちは何と熱心な、何と敬虔な、真面目な、スピリチュアルな人たちだろうか。」と、そのように思われていたわけです。何度も言いますが、その“**施し**”という行為自体、または“**祈り**”、“**断食**”も当然ですが、その行為そのものは良いんです。申し分が無いわけです。しかし、それらの素晴らしい行為も動機が不純ならば、それが利己心から出たもの、虚栄心から出たものならば、すべては偽善となるわけです。“**慈善行為**”は、“**偽善行為**”に成り下がるということです。ブレーズ・パスカルという人も偽善についてこういう言葉を残しています。パスカル曰く『**人間は偽装と虚偽と偽善に他ならない。自分自身においても、また他人に対しても。**』パスカルは「人間の本質が偽善だ」と言っているわけです。

R・C・スプロールという福音派を代表するアメリカの神学者が一人のユダヤ人少年のことを書きました。この少年は19世紀にドイツで育ったんです。彼は父親をととても尊敬しておりました。父親の言うことを忠実に守り、そして父はユダヤ人の敬虔な信仰者と見なされていましてから、安息日には必ず規定通りのことをし、そして会堂に行つては礼拝をささげていたわけです。10代のこの少年もお父さんに倣つて懸命に宗教活動に関わつたわけです。ところが10代後半になって、家族はドイツの別の町に引っ越すことになりました。で、その引越し先の町にはユダヤ教の会堂が無かつたんです。ユダヤ教の会堂はユダヤ人の成人男性が10人以上いなければ作ることが許されておりません。ユダヤ人の男性、少なくとも13歳以上を成人男性と見なすんですけれども、10人にも満たなければその町には会堂を作つてはいけないという戒律があるわけです。で、その町にはユダヤ人がほとんどいなかったということを意味するわけです。あるのはドイツの国教でもあつたルーテル教会だけあります。そして、その町に住んでいた殆どの有力者たちはルーテル教会の会員たちだつたわけです。ある日突然、その父親は家族に対して「今日から私たちはルーテル教会の教会員になることにした。ユダヤ教はやめる。ユダヤ教はもう捨てて、改宗して、私たち家族はルーテル教会の会員となる。クリスチャンとなる。」という宣言を父親はしたわけです。その宣言を聞いた息子は大変ショックを受けました。それまでは熱心に必ず安息日は休んで、そしてユダヤ教の会堂に行つて忠実に礼拝を守り行つていたのに。ユダヤ教の戒律をことごとく守つていたのに。急にユダヤ教からプロテスタントのルーテル教会に改宗するなんて一体どういうわけなのかと、父親に理由を聞いてみたところ、「この町で商売するにはルーテル教会の会員になつたほうが良いんだ。この町の有力者たちは、金持ちたちは、皆ルーテル教会員だから、私もルーテル教会員になるんだ」と。その言葉を聞いた少年は、ショックを通り越して啞然として、すっかり滅入つてしまいました。父親に対して失望したんです。そして、それが失望を通り越して、怒りへと変わったんです。「今まで一体何だつたのか。あんなに熱心に拝んできたのに。あんなに熱心に戒律に従つてきたのに。今まで一体何だつたんだ」と。その失望感と憤りは、この少年の心から生涯消えることはありませんでした。彼はドイツを出てイギリスに渡り、毎日大英博物館で哲学書を読みふけり、そして自分の思想を作り上げ、それを本にまとめました。そして、その本が世界の歴史を大きく変えました。その本の中で彼はこう言っています。『**宗教はアヘンだ**』と。もう分かつた

と思います。その少年の名は、カール・マルクスであります。共産主義を唱えたあのカール・マルクス。父は偽善者だったんです。彼の歪んだ信仰姿勢が 20 世紀の世界を大きく歪ませる、変えてしまう結果を生み出したということを皆さんにも覚えて頂きたいと思います。一人の父親の偽善が、一人の少年にどれだけの影響を与えたのか。それだけではなくて、その少年を通して何百万人、何千万人、何億人という人が影響を受けて、そして「宗教はアヘンだ」と。イエス・キリストに対する信仰すら失ってしまう人たちも大勢現れたわけでありまして。偽善の罪は恐ろしいということを知って頂きたいと思います。

で、**マタイ 6:2** をもう一度目を移して頂きたいと思います。もう一つ注目して頂きたいのは、イエスが『**だから、施しをするときには**』とおっしゃっています。「もし、施しをする時には」とは述べていません。「万が一にも、たまたま施しをする時があったならば」というような言い方は一切しておりません。単に『**だから、施しをするときには**』。簡単に読み過ぎてしまう部分ですけども、実際に示唆されていることは、イエスの弟子ならば“施しをする”ということは、これは当たり前のことである。『**施しをするときには**』施しすることが大前提。施しすることが当然。施しすることが既にここに示唆されているということです。「当たり前の行為として、自然な行為として、キリストの弟子ならば誰でも施しするだろうが、その時には気を付けなさい。」「普段から施しをしないけれども、たまたま施しをする気になったら、その時に気を付けなさい」と言ってるわけじゃないんです。「日常的に、継続的に施しするのは、これはキリストの弟子としての務めである、当然の行為である」というのが示唆されている部分であります。

で、これは聖書を通じて語られていることなので、疑いの余地が無いことだと思います。時に**箴言 14:31** から、いくつか“**施しをする**”ということは信仰者にとっては、これは自然な行為であるということを目指しておきたいと思います。他にも沢山ありますが、今晩は箴言からだけいくつか“**施し**”に関して、聖句をピックアップしたいと思います。

箴言 14:31 に先ずこう書いてあります。『**寄るべのない者をしいたげる者は自分の造り主をそしり、貧しい者をあわれむ者は造り主を敬う**。』創り主を敬っているならば、寄るべのない者に施しをするのは当然である、自然である。その自然な行為を偽善的に行ってはいけないとイエスは指摘しているわけです。

また**箴言 19:17**。『**寄るべのない者に施しをするのは、主に貸すことだ。主がその善行に報いてくださる**。』これは約束です。『寄るべのない者に施しをする』ということは、これは『主に貸すことである。』非常に大げさな表現であります。実際に“主に貸す”なんてことは出来ないんですけども、ただ主はそのように捉えて下さると、言っているわけです。貸したものは必ず返す方ですから、そのように確実に報いを与えるということを強調しているわけです。ですから、信仰者の“施し”という慈善行為は、必ず天の父から報われる約束の伴うものである。そのことをイエスは踏まえて、山上の説教でも指摘しているところがあります。

箴言 22:9。『**善意の人は祝福を受ける。自分のパンを寄るべのない者に与えるから**。』

で、最後に**箴言 28:27** をお読みします。『**貧しい者に施す者は不足することがない。しかし目をそむける者は多くののろいを受ける**。』「今月も金欠です。不足しています。」そういう人に考えて頂きたいところです。チャレンジしたいところです。『**貧しい者に施す者は不足することがない**。』と、これも約束です。不足しているのは一体何故なのかということを考えて頂きたいと思います。それは、貧しい者を見ても見ぬふりをしたからではないでしょうか。出し惜しみをしてしまったから、物惜しみをしてしまったから。「もったいないな」と思ってしまった。「ちょっと今月はキツイなと思ったので。』『**目をそむける者は多くののろいを受ける**。』とあります。“**多くののろいを受ける**。”これは避けたいですね。

ですから、聖書を通じて私たちは、“**施しをする**”ということは、当たり前のことであり、自然のこと、当然のことであり、またそれは主に喜ばれることで、主が認めて、評価して、報いて下さることだということを、ハッキリと教えられていますから、それを差し控えるなんてことは考えないわけです。積極的に

すべきだということです。但し、その際にはよくよく気を付けなさい。主から報われることを期待するならば、先ずはあなたの心を吟味するように。虚栄心から、利己心から出ていないだろうか。その動機は正しいだろうか。人に見せるために人前で行なうものか、人に褒められたくてするものか、吟味をしなければいけないということです。

2 節を理解する上で、昔の、古代の慣習も是非心に留めておいて頂きたいと思います。エルサレムには神殿があって、その神殿の中には“秘密の部屋”と呼ばれるところがありました。貧しい者に施しをしたいと思う者は、その神殿の中の“秘密の部屋”にコソッと入って行って、そこにコソソリと金品を置いていくわけです。そして貧しい者は、だれにも知られずにそこで施しを受けて、助けを受けることが出来るというシステムがあったわけです。決して人目に触れないで、施す者も施される者も、恥ずかしい思いをせずに、又高ぶる思いからも守られ、謙遜になってこの慈善行為が健全に行なわれるように、神殿の中にはこの“秘密の部屋”というものが置かれていたわけです。

で、もう一つ**2 節**のところに『自分の前でラッパを吹いてはいけません。』という言葉があります。これについてはいくつかの解釈・説があります。例えば神殿に生贄がささげられた時には、ラッパが吹き鳴らされたとか。又はユダヤ教の会堂において献金額や献金者の芳名・名前といったものが発表される時にラッパが吹き鳴らされたとか。まあ、実際にそういう教会もあります。献金箱が講壇のところであって、献金する人が真ん中の通路を歩いて行くわけです。教会員の目に見えるようにして。そして、そこに札束を入れるわけです。で、司会者などが「今〇〇さんが、いくら献金しました」と。それを聞いたら「あいつがあんなに献金したのか」と。それに負けじとそれに1万円プラスか何かしてささげようとするわけです。実際そういう教会があります。昔も今も変わらない。偽善者の集まりです。

そしてもう一つは、断食が布告された時には同時に施しもなされたので、その布告の際には合図としてのラッパが吹き鳴らされたという習慣もあったということです。また先程紹介した“秘密の部屋”というところには、その金品を入れておく器というものがあるんですが、その器がラッパの形をしていたということで、そのラッパの形をした献金箱のようなものに金品をコソソリと入れたと。それがラッパを吹き鳴らすということに後に繋がっていくという解釈もあります。

日本語の中には“ラッパを吹く”という表現はありませんが、“吹聴する”という表現はあります。自分が如何に良いことをしたのか、立派なことをやってのけたのか、それを吹聴してまわる。それは“ラッパを吹き鳴らす”と同じような表現であります。

いずれにしても、貧しい者に対して、寄るべのない者に対して施しをするということは、常に人目を避けて行われたものであり、非公開で行われたものだということです。それを後になってイエスの時代、パリサイ人や律法学者たちは、わざわざエルサレムの神殿にまで足を向けて、時間を割いて、遠くへ行ってやるまでもない。貧しい人に施しをする際には、もっと实际的に、自分の近いところで、忙しい合間を縫ってやるのも大変だから、自分で時間を設定して、自分で場所を設定して、そしてその際には腰に吊り下げた小さなラッパを「パッパラパー」と吹き鳴らして、「今からこの私が貧しい人たちに施しをします。」と言って宣伝して、吹聴して、^{けんてん}喧伝してまわったわけです。そのことをイエスは指摘しています。

ですから古代においてはわざわざ神殿に行って、“秘密の部屋”に入って、そこにラッパの形をした器に金品をコソソリと置いて、そしてそれを人知れず貧しい者たちが恥ずかしい思いをせずに、必要なものを施してもらう。そういうシステムがあったのですが、そのシステムが面倒くさい。で、そのシステムは自分をアピール出来ないわけです。誰も自分を見てくれないわけです。人知れずやること、それでは気持ちが良くないわけです。ですから、「自分の気持を良くしたい。自分の都合に合わせたい。」というところから偽善者たちは人前でのパフォーマンスを勘考するようになったわけでもあります。

で、**3 節**。『あなたは、施しをするとき、右の手のしていることを左の手に知られないようにしなさい。』

私たちが気を付けたいと思います。『右の手のしていることを左の手に知られないようにしなさい。』と言うのは、自分でも過度に意識してはいけない、と言っているわけです。誰にどれくらい施しをしたのか。そんなことはいつまでも覚えていてはならない、ということです。もう忘れてしまいなさいと。私たちは貧しい人に施しをして、援助なんかしてあげると、いつもそれを覚えていて、「あの人に、いくらいくらあげたんだ。」とか、助けてあげたんだとか、援助してあげたんだ、なんてことをいつも思っただけは、時には恩くせがましく吹聴したりするわけです。『右の手のしていることを左の手に知られないように』そのメンタリティーが私たちに問われています。人に吹聴したり、喧伝するのは、もってのほかです。自分の意識の中ですら、自分の記憶の中ですら、自分の行なった善行・施しは忘れてしまいなさい。それが、イエスが私たちに求められていることです。前にも紹介しましたがけれども、チャールズ・ハドソン・スポルジョンというイギリスの牧師、説教のプリンスと呼ばれる、そのスポルジョンが鶏を飼っていたんです。その鶏はよく卵を産みました。スポルジョンはその卵を当時売られていた一般市場の価格と同じ価格で欲しいという人に売っていたんです。「牧師なのに卵を売るなんて。しかも一般市場と同じ金額で売るなんて。安く売らないのか。ただであげないのかと。スポルジョンはケチだ。金の亡者だと。そこまでして金儲けしたいのかと。」いろんな非難を受けたわけです。しかし、それでもスポルジョンは一切そういった批判に心を留めること無く、一向に気にせず卵を売り続けたということです。で、彼が死んで天に召されてから判明したことは、その売った卵の代金は一定金額になると、銀行から引き出されて貧しい人たちに自動的に寄付されていたということです。彼はそのことを伏せて卵を売り続けたんです。誰もその事実を知る者は無かったんです。妻以外は。その施しはずっと隠されていたわけです。私だったら、あなただったらどうでしょうか。「卵を売ります。この卵の代金でアフリカの貧しい子供たちに施すんですと。どうぞ卵を買って下さい。一個百円でいかがですか」と。牧師が売るから教会員は買わなきゃと思うかもしれませんが。でも、それは偽善だと、注意したいと思います。『右の手のしていることを左の手に知られないようにしなさい。』そうでないと、それは人前での善行パフォーマンスになってしまう。そうでないと、あなたは人からほめられて地上での報いを受け取ってしまうから。天に宝が積まれることはない、と言っているわけです。

ついでにこのスポルジョンという人のメッセージとして**箴言 28:13**の聖句に基づいて、偽善行為についてこう述べています。**箴言 28:13**にはこう書いてあります。『自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者はあわれみを受ける。』とあります。私たちは偽善の罪を隠す者です。でもいつまでも隠し続けるならば、あなたは成功しないと言っています。これに対してのスポルジョンのメッセージはこうです。「罪を犯したけれども悔い改める者があわれみを受けるという道がここにはある。その人は罪を犯すという習慣を断ち切らなければならない。罪を否定する偽り者。罪を秘密にする偽善者。罪を正当化する高ぶる者は、皆罪を隠す。罪人の成すべきことは、言い表すことと捨てることである。この二つは共に進まなければならない。告白は主ご自身に向かって正直にされるべきである。その中には、悪いことをしたという認識。それが邪悪なものであるという認識。それを忌み嫌うという態度が含まれているはずである。失敗を他人のせいにしたたり、環境を非難したり、自分の弱さを持ち出したりしてはいけない。罪は残らず打ち明け、起訴に対しては自ら有罪であると申告しなければならない。これがなされるまでは、神のあわれみに与ることは出来ない。それだけでなく、悪を捨て、悪の中にとどまろうとする意図とキッパリ縁を切る必要がある。神への反逆を続けながら、王の王であるお方と共に住むことなど考えられないことである。悪い習慣は、私たちが誤った方向へ導くあらゆる場所、仲間、娯楽、本と共に捨てよう。言い表すことだけでなく、心を新しくすることだけでもない。この二つが一緒になる時に私たちはイエスの血を信じる信仰によって罪の赦しを見出すのであると。」偽善の罪を隠してはなりません。隠している間は、あなたは成功しませんし、それを告白して、それを捨てるならば、神からのあわれみを受けることができます。偽善者であることを指摘されて素直に認める人は少ないと思います。「あなたは偽善者だ。

おまえは偽善者だ。」と名指しで呼ばれたらどうでしょうか。自分の中では分かっているけれども素直に認められないプライドがあります。でも、主はすべてご存知であります。第1サムエル16:7に『人はうわべを見るが、主は心を見る。』とおっしゃってます。イエス・キリストもマタイ6章4節のところでは『あなたの施しが隠れているためです。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。』天の父は目に見えないお方ですけれども、隠れたところで見ておられます。『人はうわべを見るが、主は心を見る。』と。人に見せるために人前で善行パフォーマンスをする。それはうわべを見てもらいます。でも人は心の動機までを見ることは出来ません。表面的な行為で人はその人を判断しますが、神は表面的な行為だけで人を評価しません。神は心を見て評価されます。ですから私たちはイエス・キリストを信じる際も、イエスを心で主と信じて、口で告白して、クリスチャンになったわけです。いくらでも信じますとか、いくらでも私はクリスチャンですと自称することは出来ます。でも、主はあなたの心をご覧になります。詩篇44:21にもこう書いてあります。『神はこれを探り出されないのでしょか。神は心の秘密を知っておられるからです。』神はあなたの心をすべてご覧になり、すべての行為に対する動機を見抜いておられます。神はあなたの心の秘密を知っているんです。今あなたが何を思っているのか、何を考えているのか、何を願っているのか、何を欲しているのか、何をしたいのか、全部神はご存知です。善行をする際も、施しをする際も、神が見ておられる。その神の視線を感じて頂きたいと思います。

ルカ21:1~4をお読みします。『¹さてイエスが、目を上げてご覧になると、金持ちたちが献金箱に献金を投げ入れていた。²また、ある貧しいやもめが、そこにレプタ銅貨二つを投げ入れているのをご覧になった。³それでイエスは言われた。「わたしは真実をあなたがたに告げます。この貧しいやもめは、どの人よりもたくさん投げ入れました。⁴みなは、あり余る中から献金を投げ入れたのに、この女は、乏しい中から、持っていた生活費の全部を投げ入れたからです。』実際に献金箱にいくら投げ入れたかなんていうのは、⁵傍から見ては分からないものです。でも、イエスをご覧になったとあります。神がイエスに見せたわけです。金持ちたちが献金箱に入れたその額も。貧しいやもめ、彼女は他の男性たちと違う場所で、婦人の庭というところがあって、そこには女性が入ることが出来たわけですが、この貧しいやもめは女性ですから、他の男の金持ちたちが献金箱に投げ入れるその同じ所では献金をささげていませんでした。別々の場所で献金がなされていたのをイエスはいっぺんにご覧になったわけです。つまり神は全てをご覧になっているということです。どこで献金しようと、いつ献金しようと。神はあなたが献金箱にいくら入れるか、どのような心で入れるか、ご覧になっております。で、このやもめに関しては2レプタです。レプタというのは、今日の貨幣の価値としてはいくらと言うことは中々言い難いですが、*印がついてまして『1レプタは1デナリの128分の1に相当する最小単位の銅貨』と欄外にあります。で、1デナリというのは当時の労働者の1日の平均日給です。ですから、平均日給の128分の1が1レプタです。それが2レプタという金額です。数十円と言って良いと思います。でも、それがこの貧しいやもめにとっての生活費の全てだったということです。その日の1日の生活費。日銭。それをすべて彼女は投げ入れたと言っているわけです。“生活費”という言葉はギリシャ語で“ビオス”(bios)と言います。“ビオス”という言葉は、“いのち”という言葉からきています。英語の“バイオ”(bio)。それがギリシャ語の“ビオス”からきています。“バイオロジー”(生物学)もこの“ビオス”からきています。言い換えれば、彼女は自分の命を投げ入れたと。確かにそれは彼女の命に相当したわけです。それが無くては、一日食っていけなかったわけです。それでも彼女は献金したかったんです。何故この生活費全部を投げ入れたかは、ここには書いてありませんが、神はご存知です。で、それはイエスによって最大の評価を受けることになったわけです。金持ちたちが投げ入れたその多額の献金よりもはるかに価値のあるものだったという褒め言葉を頂いております。金額ではないことは明らかです。神は私たちのお金を必要とはしておりません。「金額が多いから神様に褒めてもらえる。金額が多ければ天における報いが大きい。」と私たちは思うかもしれませんが、そうで

はないということです。天の父は隠れたところで見ておられます。あなたがいくら献金箱にいれるのか。額ではないこともいつも覚えて欲しいと思います。生活費のすべてをささげた貧しいやもめ。彼女が模範であるとイエスはおっしゃってます。「全財産を献金箱に投げ入れろ。」と勿論言っているではありません。仮にあなたが全財産を献金したところで、あなたの心の動機が間違っているならば、そんなものはしない方が良いでしょう。それが一億円だろうといりません。神様はあなたからお金がささげられることを望んでいるではありません。神様はあなたの心がささげられることを望んでおります。神様が重視されるのは、お金ではなくて心であります。そして、その心からささげた施し、若しくは善行に対しては、必ず神は報いて下さると約束されてます。問題はその報いをどこで受け取るかということなのですが、それが偽善的な施しでも地上では報われるわけです。「素晴らしいですね。あなたは東日本大震災のためにこれだけの金額を寄付したんですか。素晴らしいですね。」新聞にも取り上げられます。感謝状も届きます。でも、これが人からの報いであるならば、生きていた話であって、死んでから残るものではありません。ましては天において報われるということにはならないわけです。この“報いを受ける”という言葉は、商業用語であります。領収書に使われる専門の言葉なのですが、私たちの現代の感覚であれば「確かに領収いたしました。」という言葉です。“報いを受ける”というのは「確かに領収いたしました。」という言葉です。ですから、人から褒められたいという動機で善行パフォーマンスをしたならば、慈善行為をしたならば、チャリティーをしたならば、正にそれを人から受けるわけです。自分で自分を褒めようとして良い行いをするならば、もう人から若しくは自分から受け取るべき報酬はもらってしまって、常に「領収済み」ということになってしまいます。「領収済み」なのに天に行ってから「神様、報いて下さい。」とあなたが願い出たところで、もうそれは「領収済み」なんだと。もう地上で「確かに領収いたしました。」ということになってしまっているわけですから、あえて天に行って「領収下さい。」と言ってももらえないといっているわけです。もうあなたは地上で全額領収済みということをされてるんだと。天において何か報いを受けようと、報酬を受けようとしても、もう領収書がある以上、それ以上領収するということは有り得ないことなわけです。人からもう受け取ってしまったならば、天の父から二重に頂こうというのは、それは腹黒いもいいところです。筋違いもいいところです。会社から出張費をもらっているのに、食費ももらっているのに、妻から「出張するから小遣いをくれと。食費が欲しいと。」二重にとりたてて。必ず裁きをうけます。神はご存知です。

で、**マタイ 23 章**を開いて頂きたいと思います。この章では、律法学者、パリサイ人たちに対して、イエスは“偽善者”という言葉で浴びせて、非常に辛辣な言葉、強烈な言葉を使って、如何にイエスが偽善行為を忌み嫌っているかということをはっきりと明かにされております。イエス・キリストが最も嫌われることが、偽善だということがハッキリ分かると思います。愛する主が最も嫌うことをあなたはしたいと思うでしょうか。クリスチャンが自分に注目を集めるような善行パフォーマンスをするならば、ひけらかすような慈善活動をするならば、如何にも自分がやりました、というような態度。それをとろうものならば、イエス・キリストから厳しい言葉を浴びせられるということも、知って頂きたいと思います。で、いくつかこの中から拾い読みしたいと思いますけれども、**13 節**のところに『**13 わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは人々から天の御国をさえぎっているのです。自分も入らず、入ろうとしている人々をも入らせません。**¹⁴ **わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちはやもめの家を食いつぶし、見えのために長い祈りをしています。だから、おまえたちは人一倍ひどい罰を受けます。**¹⁵ **わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは改宗者をひとりつくるのに、海と陸とを飛び回り、改宗者ができると、彼を自分より倍も悪いゲヘナの子にするのです。』** **23 節**にも『**わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは、はっか、いのんど、クミンなどの十分の一を納めているが、律法の中ではるかに重要なもの、正義とあわれみと誠実を、おろそかにしているのです。これこそしなければならないことです。**

ただし、十分の一もおろそかにしてはいけません。』25 節にも『わざわざ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは杯や皿の外側はきよめるが、その中は強奪と放縦でいっぱいです。』27 節にも『わざわざ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは白く塗った墓のようなものです。墓はその外側は美しく見えても、内側は、死人の骨や、あらゆる汚れたものがいっぱいです。』29 節にも『²⁹ わざわ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは預言者の墓を建て、義人の記念碑を飾って、³⁰ 『私たちが、父祖たちの時代に生きていたら、預言者たちの血を流すような仲間にはならなかっただろう』と言います。』このようにイエスは繰り返し繰り返し「わざわざ。」と言って、偽善者たちのその偽善を暴いては、嫌悪感を露わにして、彼らの罪を糾弾しております。でも、これを他人事と思っはなりません。

第1ペテロ 2:1 を今度は開いて下さい。『ですから、あなたがたは、すべての悪意、すべてのごまかし、いろいろな偽善やねたみ、すべての悪口を捨てて、』“いろいろな偽善”とあります。今私たちがテキストで見ているマタイ 6 章には、施し・祈り・断食といった事柄に対する偽善行為をイエスによって指摘されておりますけれども、それ以外にもいろんな偽善があるということです。いろいろな偽善。これを見ても明らかのように、偽善という罪は、すべてのクリスチャンが陥る罪である。若しくは陥りやすい罪であるということです。『すべての悪意、すべてのごまかし、いろいろな偽善やねたみ、すべての悪口』それを捨てないと、2 節に『生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。』とありますが、今晚このようにして、金曜日が一番疲れて眠い時間帯に、いくら聖書を学ぼうとしても、あなたの内に悪意・ごまかし・偽善・悪口というものが渦巻いているならば、心の中に満ち満ちているならば、いくら聖書を読もうと、バイブル・スタディーに参加しようとも、あなたが霊的に成長するということは望めないということです。この『救いを得るためです。』という言葉は、当然クリスチャンに対して語られていますから、クリスチャンは地獄から救われているわけです。ですから、この救いというのは地獄からの救いを表しているのではなく、むしろ現状からの救いです。今教会生活を送りながら、信仰生活を送りながら、あなたは霊的に成長しているでしょうか。今の苦しい現状。中々そこから救われないと。永遠の滅びからは救われても、この地上の生き地獄から救われたいのはなぜなのか。御言葉が私たちの魂を救うということは約束されているので、どうして救われていないのだろうか。考えさせられます。1 節をもって 2 節を見なければいけません。私たちは 2 節ばかりを、文脈を無視して「御言葉さえ読んでいれば、御言葉さえ学んでいれば成長できるんだ。救いを得るんだ。」と思っているかもしれませんが、1 節あつての 2 節だということです。条件付きだということです。『**ですから、あなたがたは、すべての悪意、すべてのごまかし、いろいろな偽善やねたみ、すべての悪口を捨て**』なければ、いくら御言葉を読んでも学んでもあなたは成長することはないんです。救いを得ることもないんです。パリサイ人、律法学者たちは、慈善家を気取って、ひたすら施しや祈りや断食に打ち込む姿を演じて、人々からの称賛を得ようとしていたわけです。動機は人に見せるためです。人に褒められるためでありました。常に隠れたところすべてを見ておられる天の父を意識しなければならぬわけですが、彼らは父よりも人の目を意識したわけです。ちなみに“偽善者”という言葉のヘブル語ですと、“ナーラー・ミム”と言います。これは原意は、“自分を隠すこと”からきています。ギリシャ語は、“ヒポクリテース”。それは“仮面をかぶった俳優・役者”のことを言ったわけですが、ヘブル語の“ナーラー・ミム”という言葉は“自分を隠すこと”からきています。自分を隠して別人になります。演じるということにもなるわけですが。それは私流の言い方で表現すれば、“見栄はる君になる”ということです。自分を隠して“見栄はる君になる”。見栄を張る。その姿です。それが仮面をかぶった“ヒポクリテース”でもあるわけです。自分が主役になりきって、舞台上でスポットライトを浴びて、そして人々から拍手喝采を受けて、名をあげて、気分が良くなるわけです。すべて報いを受け取ってしまってます。残念ながら、多くの教会はそうした役者たちが、いっぱいステージでスポットライトを浴びて、演技派揃いの、ハリウッ

ドのような、そんな教会があるということを覚えて頂きたいと思います。立派な舞台装置が無くても、舞台小屋のような小さな小屋のような教会でも、残念ながらそこには演技派の舞台俳優がいっぱいおります。人に見せるため、人から称賛を受けるため、人に認められるため、感謝されるために何かをするならば、それが施しだろうと、祈りだろうと、断食だろうと、他のなんであろうと、既に人間から報いを受け取ってしまうということを、領収書を受け取ってしまうということを、それを覚えて、「断じてそんなもったいないことはしてはならない。」と自分に言い聞かせて、なるべく人にわからないように、人を意識するのではなくて、神の目を意識して隠れて行く必要があるということです。

勿論誤解のないようにしておきたいと思いますが、私たちは世界の光ですから隠れることは出来ません。良いことをすることは必ず人の前に晒さらされますけれども、でもその動機は、常に父があがめられるため、天の父に栄光が帰せられるためですから、どうしても人目についてしまう、例えば、私も皆さんの前でこのように良いことを行っているわけです。聖書を説くということは確かに良いことであります。でも、人前でやっているから、もう人から報いを受け取ってしまうかと言ったら、必ずしもそうではないということです。私の動機が、皆さんに褒めてもらいたいから、「2時間以上メッセージするなんて、素晴らしい牧師ですね。」という褒め言葉を頂くために私が長く話しているならば、私の報いはもうこの地上で受け取ってしまっただけで領収書を頂いてますので、これでまた天国に行っても神様に「あらためて領収書を下さい」と言っても、もらえないわけです。でも誰も褒めてくれません。幸いです。褒めてもらえなくてもいいです、褒めたくても。そのようにして私たちも十二分に心を吟味して、施しする時、まあ施しも献金と考えて頂いて良いと思います。教会によっては献金の名目、献金者の芳名、そして献金の額までも週報に載っています。「誰れさんがいくらしました」とか。又はキリスト教の団体でもご芳名という欄があって金額が載っていないまでも名前がそこにのるとか。又は名前は載らないまでも金額がそこに載るとか。何故そこに載せるのか私は首を傾かたむげます。勿論お金の流れが明瞭になるということは必要なことですし、何でもオープンにするということは大事なことです。でも動機が探られます。「今週は少なかったな。もっとささげなきゃ。」それがもしかしたら動機かもしれません。「あの人の名前があるのに、私の名前がないとは。献金しなきゃ。サポートしなきゃ。」それは既に人からの報いを受け取ることになります。ですからこの教会では、教会の週報に献金の名目だとか、献金者の名前だとか、献金の額も一切載せません。勿論問い合わせがあれば、いくらでもいつでも教会の銀行口座も見せることが出来ますし、お金の流れもいろいろなレシートや領収書を見せることはいつでも出来ます。でも、なるべく私は誰がいくらささげているかということを知りたくありません。会計係の人が与えられれば、その人が牧師にも分からないように、人に分からないように配慮して、それを奉仕として、行ってもらえれば嬉しく思います。有難く思います。天に宝を積むために、勿論献金するわけではないですけれども。ただ私たちは神様の御名があがめられるために。神様に喜んでもらえるために。それが動機で施しをしたり、祈ったり、また断食をしたり。で、その結果、神様が報いて下さるならば、それは有り難いものとして頂戴するわけであります。ですから教会で献金のアピールをするとか、勿論必要を正直に教会員に打ち明けて、そして「そのために祈って欲しい。」とか、「そのためにささげたいと思う人は自由にどうぞ。」ということは言えたとしても、「皆さんの献金がなければこの教会はつぶれてしまいます。」とか、「皆さんの献金がなければこの働きは出来ません。」とか、そういうことは言いません。又、先程も紹介したように「誰れさんが今いくら献金しました。それは百倍にもなって祝福されます。」とか、そんなことも公表するつもりもさらさらありません。人目ではなく、イエスの目を気にしながら、イエスがいくら献金したのかはご存知です。それがイエスにとってどれだけの価値のあるものか、イエスが評価してくれます。人が評価するものではありません。人が見るものではありません。献金袋に自分の名前を書いて、自分がいくら献金したか、牧師に知ってもらいたいから。教会員にもちゃんと知らしめたいから。そういうふうな動機でささげるならば、残念ですけれども、それは神に対しては

届けられません。それは人間止まりの、地球止まりで終わってしまいます。誰が献金したか分からない匿名で「これを神の栄光のために使って下さい。」ということならば、その額がいくらであろうと神は何倍にも祝福して用いて下さるはずです。

で、最後に『私はどうするでしょう』という詩を紹介したいと思います。ルース・カームズ・カルキンという人が書いた『私はどうするでしょう』という詩です。

主よ、ご存知ですよ。私があなたにお仕えしていることを。

脚光を浴びながら、凄まじい情熱を傾けて。

ご存知ですね。婦人集会であなたのことを熱心に語っているのを。

ご存知ですね。親睦会を發起してどんなに意気衝天しているかを。

ご存知ですね。聖書研究会に向けているあのひたむきな私の思いを。

でも、私はどうするでしょう。

水の入ったたらいを指して、腰の曲がったシワだらけの老婆のこわばった足を洗っておあげなさいと、あながおっしゃったら。

幾日も幾月も部屋の中でひっそりと誰の目にも留まらずに、誰に知られることもなく。

誰の目にも留まらず、誰に知られることもなく。そのことをこのルース・カームズ・カルキンという人は、私たちにも問うています。私はどうするでしょうと。あなたはどうするでしょうと。誰の目にも留まらずに、誰にも知られることもなく。それが私たちのやっていることの動機でしょうか。それが私たちのモットーでしょうか。誰の目にも留まらない。誰にも知られなくて、それで良いんですと。誰かの目に留まらなければ満足しないとか、このことは知ってもらいたい、分かってもらいたい。それをアピールしようとしているならば、残念ですけれどもそれはすべて人間からの報いで領収済みということになってしまいます。

ロイドジョーンズは『人はあなたに心を留めない。あなたを愛してもくれない。あなたを褒めてもくれない。しかし、あなたの主である方はあなたを褒めて下さる。もしそうなら、人々は何者にもない。』と言いました。人々は何者でもないんです。あの人が見ていなくても、あの人に認めてもらえなくても、人々は何者でもありません。誰もあなたのやってることを気にも留めないかもしれません。心にも留めないかもしれません。あなたがいくら献金しているか。あなたがどんな奉仕をしているか。あなたがどんな施しをしているか。断食をしているか。祈りをしているか。人は知らないかもしれません。評価もしてくれないと思います。「私は毎朝何時に起きて祈っています」とか、「断食をして祈っています。」「これだけの献金をしているんです。」人は誰もその事実を知らないかもしれませんが、神様は全部ご存知であるということ。それだけが関心事であるとするれば、もう人など気になりませんから、あなたはその地味な活動を喜びをもって平安の内に続けることが出来ると思います。

でも、人に認めてもらいたい、人に見てもらいたい、人に評価してもらいたいという人は、人に見てもらえるまでは満足できませんので、もしそれが万一にも人の目に留まらなければ、あなたはそれを途中でやめてしまいます。「凄いですね。毎週あなたは断食しているんですね。」「凄いですね。あなたは十分の三も献金してるんですか。」そうやって認めてもらえれば続けます。でも認めてもらえなければ、知られなければ、朝早く起きて人知れず教会に来て祈っていたところで誰にも見てもらえなければ途中でやめちゃうわけです。その奉仕も、陰ながらやっていたことも、人の目に留まらなければ、段々疲れて面倒になってきたらもうやめちゃうわけです。褒められてなんぼのものだと思っているからです。「牧師さんに褒められたら、私はやる気を出してもっと頑張るのに。」やめて下さい。やらなくていいです。私があなたを褒めた

ところで、大した額にはなりませんから、是非イエス・キリストが天においてその御座の裁きにおいて評価して下さるその報いがどんなものか。預言者に水一杯あげるだけでも、それは報いの対象となるとイエスは言われているわけですから、大いに期待して頂きたいと思います。

ですから、このマタイの 6 章はこれからその動機を主が私たちの心を探りながら、私たちが普段やっていることが正しいかどうか、天において報われるものかどうか、霊的に価値のあるものかどうか、神に本当に喜ばれるものかどうかを吟味する上では、非常に有用な箇所でありますけれども、ロイドジョーンズが言った通り、それは私たちの心を突き刺すような、また過去にやったことがすべて無駄であったかのようなことを突き付けるような、非常に厳しい痛烈な内容ともなっております。でも、もう過去は過去でいつまでも過去のことを思ってはなりません。これから先、過去の“**偽善行為**”を続けていくなれば非常に残念なことであり、もったいないことであり、無駄なことでありますけれども、これからあらためて“**偽善の罪**”をやめて、そして心を探られる主に対してすべてをさらけ出して、その上で改めていくなれば、その上で心をきよめて頂きながら良いことを今まで以上によりいっそうに熱心に行なうならば、遅くはありません。イエス・キリストがまだ来られていない間、携挙の間。あとそれが何日残っているか分かりません。何年残っているかも分かりません。でも、チャンスが与えられていることは確かであります。明日の朝イエス・キリストが迎えに来られるとしたら、あなたに残されている時間はあと数時間ということになります。その数時間の間にあなたの永遠に関係する、永遠に影響を与える報いが算定される最後のチャンスということになります。明日があるとは限りませんから、善は急げといいます。今晚から是非そのことを始めて頂きたいと思います。既に間違っ行ってしまっていたものならば、それは改めて頂きたいと思います。では、今日はこれで終わって、次回祈りのことを話しながら、特に『主の祈り』について皆さんに教えていきたいと思います。『主の祈り』も、ともすれば偽善的な祈りに成り下がってしまいますから、そんなもったいない虚しい祈祷文を毎週礼拝のプログラムの中で朗唱するなんてことはしてはいけないということを次回お話したいと思います。